

城南中学校と『葦の芽』

杉豊 岡田幹治（本町三丁目出身）

手許に、『葦の芽』第六号と題された小冊子がある。高田市立城南中学校が一九五六年（昭和三十一年）三月に発行したものだ。A五版、六十二ページの、紙が黄ばんでしまったこの冊子を手にすると、私の心は半世紀もの昔にタイム・スリップする。

私が城南中に入学したのは、五十五年前の一九五三年四月。同校が市内大手町の紡績工場跡に開校して五年後のことだ。教員室や三年生の教室がある校舎は新築されていたが、一、二年生の教室は工場の寄宿舎がそのまま使われていた。在学中に図書室ができ、玄関が完成し、施設が少しずつ整っていった。そんな時期だった。

校歌はまたなく、私が入学した直後に、「仰ぐ妙高 陽に映えて」で始まる生徒会

歌ができた。しばらくして、小田正郎、吉村康彦という若い先生が作詞、作曲した応援歌「立て若人、光りをあびて」ができた。こうした面でも、整備の途中なのだった。

へそ曲がりの私は、新潟大学の付属小学校から城南中へ進んだ。級友たちのほとんどと別れて城南中への道を選んだのは、「良家の子女が集まる付属中では、本当の社会に触れることはできない」と、子どもなりに考えたからだ。さぞかし生意気で嫌味な中学生だったことだろう（今でも相当に嫌味な人間だが）。その選択が正しかったかどうか、神のみぞ知るのだが、ただ、付属中ではできなかったかもしれない体験をいくつもしたことは間違いない。その一つが、『葦の芽』という生徒作品集への寄稿である。



『葦の芽』は、創立四年目の五一年から毎年、十号まで発行され、それ以後、三年に一回の発行になった。そこには、敗戦から復興、そして高度経済成長へと移っていく時代のなかで、一地方都市の中学生たちが何を考え、どう行動したかが書き記されている。当時の社会や暮らしぶりも記録されている。たとえば、手許にある第六号には、家につしかなない時計が動かなくなつたのに新品が買えず、しばらく時計なしで過ごした一家の悲しみと喜びを描いた作文が載っている。敗戦から十年を経て復興は終わったとされる時期でも、私たちはまだ貧しかったのだ（これを書くために上越市の担当者に調べていただいたが、『葦の芽』全号が保存されているところはなかった）。

さて、手許にある第六号を改めて手にとってみると、まず、誌名がカッコいい。誌名に込めた思いを、当時の伊沢儀太郎校長は表紙裏にこう記している――「人

は考える葦である。……故に吾等の威厳は一に考えるということにかかっている」とパスカルは書いた。……青少年は人間の若芽であり、考える葦の芽である。私は葦の芽の成長に大きな希望をかけている、と。



表紙をめくると、奈良・東大寺大仏殿の屋根が、明るい九月の光の中に夢のように浮かんでいる一枚の写真。池田晃先生の労作だ。続いて、伊沢先生執筆の「京郊雑記」が掲載されているのだが、このエッセイがすばらしい。

「京郊雑記」は梅尾（とがのお）、詩仙堂、嵯峨（さが）という京都郊外の名所三方所を訪ねた旅行記である。だが、単なる見聞録に終わっていない。行く先々で先生は静けさの中にじつと座り、思索にふける。その思索のあとが、達意の名文でつづらられている。しかも、三方所それぞれに自作の和歌が付けられているのも、ちよつと真似ができない。うち一首を紹介しよう。

梅尾の石水院のひろさがり
たにふかうして日もかげりおつ

もちろん、このエッセイのよさは中学三年の私には全く理解できなかった。おそらく当時は読んでいかなかっただろう。しかし後年、新聞記者になってから読み直し、伊沢先生の誠実で高潔な人格と高い教養が伝わってくる文章に感動した。

伊沢先生は、戦後の学制改革で生まれた城南中の初代校長に就任し、「良識ある職業人の育成」という目標を掲げて七年間、学校運営に当たられた。私は在校中、毎週のように全校集会でお話をうかがったはずだが、どんな内容だったか、全く記憶がない。ただ、しばしば「パンパン」という言葉が出てきたことだけを覚えてい

る。先生は「占領軍兵士を相手にする夜の女たち」を表す言葉に、どんな思いを託され、中学生たちに何を伝えようとしたのだろうか。どんなかご存知の方、いらっしやらないだろうか。

夫、川上登、井田典子（以上、文）、上浦みつえ（詩）、浦井哲夫、小岩孝子（以上、絵画）、浦野俊則（書）の名が見える。

この思い出をまとめるため、一、二年生の文も含め読み返したが、どれもなかなかの出来栄えだ。なかでも、堀田さんの「狩猟に行つて」と本山さんの「就職試験に思う」に感心した。前者は、近所の猟師に誘われて鳴撃ちに行き、「生活のためでなく、ただほんの遊び、心のために、何の罪とがないあんな小さな命をとらなければならなかった僕たちの残こさが、たえられぬほどあわれになって」くるまでの心の変化を、実在的確に記している。また後者は、貧しさゆえに進学をあきらめ、就職試験を受けるが、母親がいらないことを理由に落とされた理不尽を切々とつづつて、胸を打つ。

この第六号には、「これでいいのか」と題する私の文も載っている。身の回りや社会から六つの出来事を取り上げ、それをめぐる考えを述べたものだが、読んでみると、思考の浅さや表現の拙劣さが目について、よくもこんな文を書いたな、と恥し入るばかりだ。でも、当時は大真面目だったのだろう。そして掲載されたことがうれしくてならなかった。だから、大切な思い出の品として、いまも本箱の片隅に残っているわけだ（第五号には私

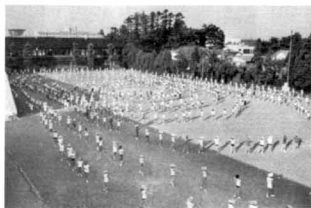
が二年生のときに書いた文が載っているはずだが、ある人に貸し失くしてしまつた。

城南中卒業後、私は高田高等学校から一橋大学に学び、朝日新聞社に入った。

地方記者、経済記者、アメリカ・ワシントンの特派員、論説委員などを務めた三十数年間は、出世とは無縁だったものの、定年まで鉛筆を握り続けられた点では幸せだった。そして定年から七年経つたいまも、フリーライターの仕事を細々とだが続けている。頭も体も衰えていくのに、なぜまだ「調べて書く仕事」をやめないのか。それはたぶん「不正なことを知つたら黙つてはいられない」という、誰もが持っている心「プラス」「書いたものが活字になる喜び」の故ではないかと思う。そして、書いたものが活字になる喜びを最初に知つたのは、城南中での体験ではないかと、最近、考えるようになった。そうだとすれば、「葦の芽」は知らず知らずのうちに私の人生に大きな影響を与えたことになる。

城南中は一九七九年、上越市の中学校統合計画にもなつて閉校になった。三十一年の歴史だった。今年は、四八年の創立からちょうど六十年。跡地には消費生活センターや高田幼稚園が立ち、往時

の面影はきれいになくなっていく。しかし、そこで学んだ三年間のことどもは私の脳裏にしっかりと残り、ことあることによりみがえってくる。



(左) 校舎全景、(右) グランドいっぱい踊りの輪（いずれも記念誌「三十年のあゆみ」より）